日本語アスペクトマーカー「－テイル」結果状態用法の習得における使役主の影響について

泉　久美子

0．はじめに

日本語アスペクトマーカー「－テイル」は習得が難しいとされ、動詞に内在する瞬間性、限界性など時間的な特質と習得と関わりについての研究が多くなされている。しかし、「－テイル」の意味決定には自動詞、他動詞との統語的な側面も関わり、学習者の混乱を招いている。

小林（1996）は「蝋燭の火が消えている」という結果状態を表す自動詞文について、文中にない使役主が吹き消すことによって蝋燭の火が消えた場合、結果状態を自動詞で表すことを受け入れにくい日本語学習者もいて、「受身 / ラレ＋テイル」を使う傾向があると指摘している。

日本語の自動詞の使役構造について、影山（1996）は、使役主と変化対象を同定した上で使役主を抑制した反使役 -e- 自動詞と、使役主を意味構造で抑制し統語構造に投射しない脱使役 -ar- 自動詞があると提案している。本稿ではこの使役主の存在を含意する自動詞の特質によって、結果状態の「－テイル」を「自動詞＋テイル」ではなく、「受身 / ラレ＋テイル」と捉える学習者がいるのではないかと予測し、日本語を学習する英語話者、中国語話者、韓国語話者を対象に文法テストとピクチャーテストによる調査を行い、考察した。

1．時間的側面からみた日本語アスペクトマーカー「－テイル」

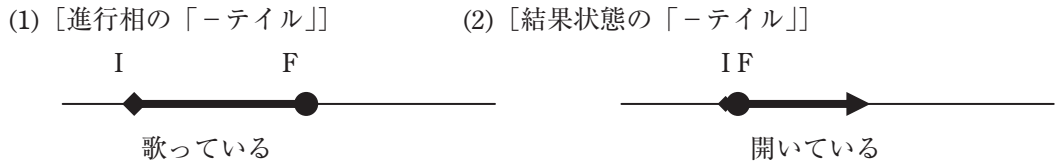
本稿は自動詞と日本語アスペクトマーカー「－テイル」の統語的な面を検討するが、白井（2000）は「－テイル」の意味決定には動詞の持つ時間的側面と統的側面の両方が関与するとしている。まず時間的な側面を概観する。

1．1　時間軸における日本語アスペクト「－テイル」

日本語のアスペクト「－テイル」はどのような状態を表わすか、白井（2004）は時間軸を使って、進行相の「－テイル」の例文 (1) と結果状態の「－テイル」の例文 (2) を、図１のように表わしている。

(1) 学生が歌を歌っている。

(2) 窓が開いている。



［I：始点 the Initial point　　F: 終点 the Final point］

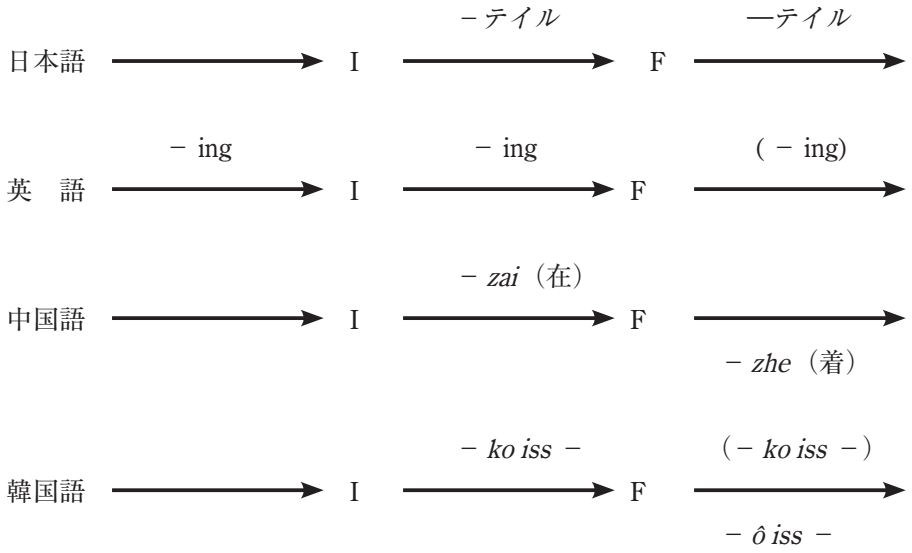
図１．時間軸における日本語アスペクト「－テイル」

図１において、「進行相」は動作の継続を表し、「結果状態」はＦのところで起きた結果が、その後も続いていることを表わす。「開いている」はＦで開いた、そしてその状態が残っているということを表わす。

尚、「－テイル」には［進行相］［結果状態］の他に、習慣、完了などの意味役割があるが、習慣は進行相、完了は結果状態から派生したものと考えられるので、本稿では、［進行相］［結果状態］に焦点をあわせて考察する。

１．２　言語によるアスペクトの違い

日本語のアスペクトマーカー「－テイル」は　１．１で説明したように、２つの違った様相を表わすことができる。では、他言語のアスペクトマーカーはどのような様相を示すか、英語、中国語、韓国語について、Shirai(1998) は次のように示している。



［I：始点 the Initial point　　F: 終点 the Final point］

図２．言語によるアスペクトの違い

図２のように、日本語は進行相、結果状態を「－テイル」で表すが、英語のアスペクトマーカー「－ ing」は結果状態を表すことはあまりない。また、中国語には、－ *zai*（在）と

－ *zhe*（着）、韓国語には－ *ko iss* －と－ *ô iss* －、それぞれ、二つのアスペクトマーカーがある。このようなアスペクトマーカーの言語間の時間的な違いは、学習者を混乱させると思われる。

１．３　個々の動詞に内在する時間性の違い

学習者を混乱させる原因として、個々の動詞に内在する時間性の違いもあげられる。Hofmann,Th,R & Kageyama,T.(1986) は、個々の動詞に内在する時間性について、日本語と英語の違いの例 (3)(4)(5) をあげている。(3) ～ (5) の中で、英語の (4) は非文になる。これは、日本語の「知る」は瞬間的な状況を表わし、(3) のように、アスペクトマーカー「－ている」が必要なのに対し、英語の「know」は動詞自体が継続性を持っているため、(5) のようにアスペクトマーカーを必要としないからである。この例は個々の動詞の持つ時間性が日本語と英語で違うことを示しているが、他言語でもそれぞれの動詞に内在する時間性が違うことが予測される。この違いも、学習者にアスペクトの表わし方について、混乱を与えると思われる。

(3)　私は彼を知っている。

(4)　*I am knowing him.

(5)　I know him.

２．結果状態の「－テイル」の統語的習得の難しさ

２．１　結果状態の「－テイル」の統語に関する問題

１．１～１．３で示したように、「－テイル」には、時間的な側面で習得が難しいと思われる要素がある。さらに、結果状態の「－テイル」には統語に関する問題もあると思われる。小林（1996）は (6) の結果状態を表す自動詞文について、（ｉ）（ii）のように解釈し、問題点を提起している。

(6)　蝋燭の火が消えている。

（ｉ）蝋がなくなり、蝋燭の火が消えた場合

（ii）誰かが吹き消すことによって、蝋燭の火が消えた場合

（ii）のように、誰かが対象に力を加えて対象物が変化した場合、結果状態を自動詞文で表すことを受け入れにくい日本語学習者もいて、「受身 / ラレ－テイル」を使う傾向があると指摘している。

２．２　結果状態の「－テイル」の統語

では、結果状態の「－テイル」がどのような動詞と結びつくのか、Shirai(2000) では、対を持つ動詞について、次のように述べている。

Ｉ.「他動詞＋テイル文」は動作主を表示し、その動作主の動作は時間幅を持つので進行相

となることが多い。
(7) 友達が　歌を　歌っている（他動詞＋テイル）。

Ⅱ．結果状態を示す「自動詞＋テイル」文は、使役主を文中に表示せず、瞬間的な結果に焦点が置かれる。
(8) 窓が　開いている（自動詞＋テイル）。

(7) のような進行相では、「－テイル」は他動詞と結合し、動作主がいて、その動作の時間幅を表わすのに対して、(8) の結果状態は「－テイル」は自動詞と結合し、使役主を文中に表示せず、瞬間的な結果に焦点が置かれている。しかし、(8) には、文中に現されないが、誰かが窓を開けたということが含意されている。つまり、小林（1996）が指摘しているように、結果状態を示す「自動詞＋テイル」文には、結果に影響を与えた使役主が関与すると予測される。このような日本語の自動詞文にみられる使役とはどのようなことかについて次に検討したい。

３．日本語の自動詞の使役構造

日本語の自動詞の使役構造について、影山（1996）は、日本語では自他を転換する接辞形態が非常に発達していて、この接辞が英語では不可能な非対格の使役化を司っていると述べている。そして、影山（1996）は自動詞化の接辞の例として -e- 自動詞と -ar- 自動詞を提案している。

影山（1996）が主張する -e- 自動詞は、接辞 -e- が加わることによって他動詞から派生した自動詞である。例えば、割る war-u という他動詞は、接辞 -e- が加わることによって「割れる war-e-ru」という自動詞になる。また、–ar- 自動詞は、他動詞に ar- という接辞が付くことによって派生した自動詞である。例として、他動詞「挟む hasam-u」は -ar- という接辞が付くことによって、「挟まる hasam-ar-u」という自動詞になる。
では、影山（1996）の -e- 自動詞と -ar- 自動詞の使役構造を詳しく検討したいと思う。

３．１　-e- 自動詞

(9)、(10) の例文にある「勝手に」という副詞は、状態変化の達成が自らの性質によるものであることを示し動作主はない。使役主は対象物の変化を補助ないし、促進するものであると考えられる。

(9) 蝋燭の火が　<u>勝手に</u>　消えた。
(10) 取っ手が　<u>勝手に</u>　取れた。

-e- による反使役化を影山（1996）は次のように表わしている。
(11)　x ＝ y CONTROL［（y）BECOME [y BE AT-z]］

接辞 -e- は外項の使役主と内項の変化対象を同定し､外項を抑制する。外項が抑制されると、内項だけが統語構造にリンクされるので、統語的には、-e- 自動詞は非対格動詞となる。

３．２　-ar- 自動詞

(12)(13) の例文の副詞「難なく」「どうしても」という副詞から使役主の努力が関与することがわかる。非文 (14) のように、使役主が関与しなければ、勝手に、木は植わらないので、この副詞が付く場合は使役主が隠れていると考えられる。

(12)　難なく　募金額が集まった。
(13)　どうしても　この木はうまく植わらない。
(14)　* 勝手に、庭に木が植わった。

-ar- による反使役化を影山（1996）は次のように表わしている。

(15)　x CONTROL [y BECOME [y BE AT-z]]
　　|　　|
　　ϕ　　内項

自動詞化接辞 -ar- は、使役主を意味構造で抑制し、統語構造に投射しないことで自動詞化を行う。

３．３　日本語の自動詞の分類

影山（1996）は、この -e- 自動詞、-ar- 自動詞と、派生によらない本来的な非対格自動詞も含め、日本語の自動詞を次のように分類している。

a. 非対格自動詞：おのずと然る（自然発生）
b. -e- 自動詞　　：自ら然る（反使役化）
c. -ar- 自動詞　　：動作主を隠す（脱使役化）
d. 非能格動詞　　：みずから行う

この日本語の自動詞分類の中で、-e- 自動詞と -ar- 自動詞から、使役主の存在を含意する自動詞の特性を窺い知ることができる。この使役主の存在が、小林（1996）が指摘しているように、使役主が対象に力を加えて対象物が変化した場合、結果状態を自動詞文で表すことが受け入れにくい日本語学習者がいて、「受身 / ラレ + テイル」を使う傾向がでてくるのはでないかと思われる。そこで、影山の主張する -e- 自動詞、-ar- 自動詞、二つの自動詞を使って次の仮説をたてた。

４．仮説

仮説：-e- 自動詞、-ar- 自動詞の結果状態には自動詞文に現れない使役主の存在があるため「自動詞 + テイル」ではなく、「受身 / ラレ + テイル」と捉える日本語学習者がいるので

はないかと予測する。

5．調査

この仮説を検証するためにアンケートによる調査を行った。調査は、文法テストとピクチャーテストを行った。

1）被験者：日本語学習者 35 人（英語母語話者 11 人・中国語母語話者 12 人・韓国語母語話者 12 人）、日本語学習者は主に日本語能力試験１級、あるいは２級合格者を対象とした。

さらにコントローラーとして、日本語母語話者 36 人を加えた。年代別にすると 20 歳代 12 人、30 － 40 歳代 12 人、50 － 60 歳代 12 人という構成にした。

2）テストに使った動詞分類

接辞 -e- と接辞 -ar- で転換する自他動詞に加え、自然発生・自然現象の非対格文、動作主が意思的である非能格文も比較のため加えた。

① -e- 自動詞（消える、切れる、煮える、焼ける、破れる）
② -e- 自動詞の双対他動詞（消す、切る、煮る、焼く、破る）
③ -ar- 自動詞（植わる、掛かる、集まる、揚がる、捕まる）
④ -ar- 自動詞双対他動詞（植える、掛ける、集める、揚げる、捕まえる）
⑤自然発生・現象の非対格自動詞（降る、乾く、濡れる）
⑥非能格自動詞（働く、遊ぶ）

結果状態：①③⑤　　進行相：②④⑥

3）タスク　：　文法テストとピクチャーテスト

タスク１．文法テスト

結果状態の -e- 自動詞文、-ar- 自動詞文の中で、自動詞を受身と捉えていないか調べるために、-e- 自動詞、-ar- 自動詞について、それぞれに「－ている」文５つと「－受身 / られている」文２つを用意し、「自動詞－ている」を「－受身 / られている」を選ぶ率を調べた。タスク１では　次のような文と動詞を用意した。

-e- 自動詞文

(16)　文：さっき柔道で投げられたんだけど、骨が（a. 折れている、b. 折られている）かもしれない

この他、タスクに使った動詞：砕ける、折れる、取れる、壊れる、抜ける

-ar- 自動詞文

(17)　文：この道は、高速道路に（a. つながっている、b. つなげられている）から、この

道で行きましょう。

この他、タスクに使った動詞：決まる、助かる、つながる、混ざる

4）タスク２　　ピクチャーテスト

ピクチャーテストは、サザエさんの漫画の絵を利用して行った。接辞 -e- と接辞 -ar- で転換する自他動詞に加え、自然発生、自然現象の非対格文、動作主が意思的である非能格文も比較のため加えた。

双対自他動詞については、動作主の動作が見える絵と、結果状態を表した絵を左右に並べ、右側の結果状態を引き起こした使役主 / 動作主を左側に窺えることができるようにした。それぞれの絵について次の（ｉ）（ii）（iii）の、どの文を選ぶか、傾向を調べた。

（ｉ）自動詞＋テイル文、

（ii）他動詞＋テイル文、

（iii）受身 / ラレ－テイル文

それぞれの絵は次のように提示した。

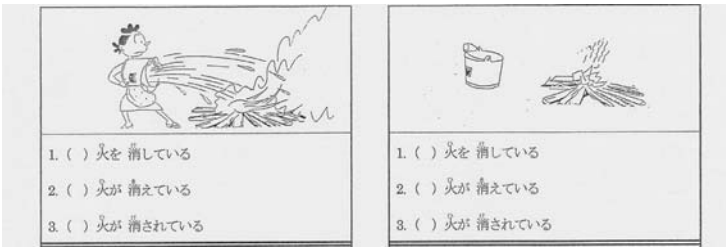


図３　-e- 自動詞文の双対他動詞文の絵、-e- 自動詞文の絵

図３の絵について、左側でサザエさんが焚き火を消しているが、動きがあるので、進行相になる。右側は火が消えたという状態で、結果状態である。この結果状態の絵には、火を消した使役主はいない。左側は「他動詞＋テイル」文で、右側は「自動詞＋－テイル」文になる。

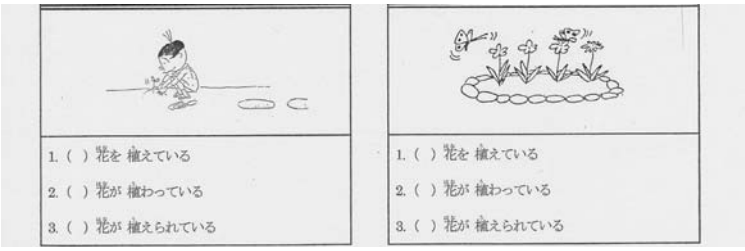


図４　-ar- 自動詞の双対他動詞文の絵、-ar- 自動詞文の絵

図４の絵について、左側の絵には動作主がいて、「花を植える」は、進行相の「他動詞＋テイル」となる。右側は絵の中に使役主はいないが、結果状態であるので、「自動詞＋－テイル」で表される。

図５　非対格文の絵

図６　非能格文の絵

図５の絵は、自然現象を表わす非対格文、図６の絵は動作主の意思的な行為を表わす非能格文であり、比較として加えた。

６．結果

６．１　文法テスト結果

	日本語学習者	日本語母語話者
「受身 / ラレ－テイル」を選んだ率	22.2％	0.9％
標準偏差	2.02	0.32
n.	35	36

表１．　「－テイル」文で「受身 / ラレ＋テイル」を選んだ回答率の平均

日本語学習者の傾向

日本語学習者は「受身 / ラレ－テイル」を 22.2％が選び、「受身 / ラレ－テイル」を使う傾向がある。また、標準偏差は 2.02 で、結果にばらつきがあり、使用傾向の強い学習者と使わない学習者、両者には幅があった。

日本語母語話者の傾向

日本語母語話者も 0.9％が「受身 / ラレ－テイル」を使い、「-e- 自動詞 /-ar- 自動詞－テイル」と「－受身 / ラレ－テイル」の選択は決定的でないことがわかった。

6．2　ピクチャーテスト　結果１　「受身 / ラレ +「テイル」の使用傾向

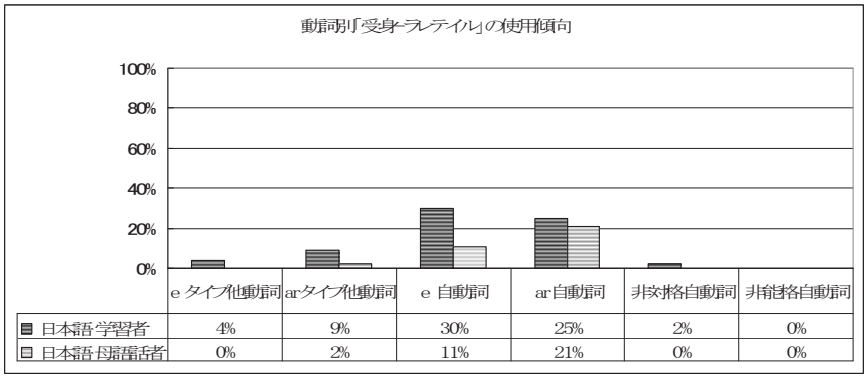


表２．　ピクチャーテスト　動詞別「受身 / ラレ－テイル」の使用傾向

（表内の e タイプ他動詞は -e- 自動詞の双対他動詞、ar タイプ他動詞は ar 自動詞の双対他動詞のことである。）

１）日本語学習者の傾向

動詞別でみると、動作主が意思的である非能格自動詞文では、「受身 / ラレ－テイル」を選ぶ学習者はいなかった。自然現象を表わした非対格自動詞では「受身 / ラレ－テイル」を２％選んでいるが、ここでは検討しない。他動詞文では、-e- 自動詞の双対他動詞を４％、-ar 自動詞の双対他動詞９％選んでいる。他動詞文の絵には動作主と対象物の両方があるので、視点を動作主でなく、対象物に置いた場合は、「受身 / ラレ－テイル」を選んでも問題はないかと考える。しかし、-e- 自動詞文の絵には使役主は表示されていないが、「受身 / ラレ－テイル」を 30％、-ar 自動詞文では「受身 / ラレ－テイル」を 25％と他の文よりも高く選んでいる。使役主がいることを他動詞文の絵から窺い知ることができるので、結果状態を自動詞文ではなく、「受身 / ラレ－テイル」文で捉えるのではないかと考えられる。

２）日本語母語話者の傾向

今回の調査は、日本語母語話者は、結果状態について、全て自動詞文を選ぶであろうと思い、比較の対象として調査をしたが、-e- 自動詞文では「受身 / ラレ－テイル」を 11％、-ar 自動詞文では「受身 / ラレ－テイル」を 21％が選び、予想外であった。「障子を破られた」「ドアが閉められている」など、被害の受身と捉える場合もあったのではないかと考える。年代別にみると、20 歳代の方が「受身 / ラレ－テイル」を選ぶ率が高かった。特に「植わる」という自動詞については 20 歳代の日本語母語話者の 12 人中 8 人（66％）は「植えられている」を選んだ。回答で「受身 / ラレ－テイル」を選んだ被験者に実験後尋ねると「植わる」という自動詞は使わないということであった。ピクチャーテストの 20 歳代の傾向から、今後動詞によっては日本語母語話者「－テイル」文には、自動詞ではなく、非情の受身が使われる可能性があるのではと予想される。

６－３．ピクチャーテスト結果２．　言語間の違い

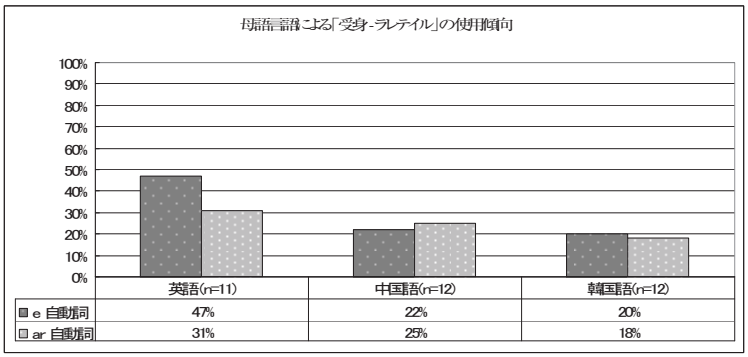


表３．英語、中国語、韓国語の「受身 / ラレ＋テイル」の使用傾向

ピクチャーテストで、日本語学習者は -e- 自動詞文では「受身 / ラレ－テイル」を 30％、-ar 自動詞文では「受身 / ラレ－テイル」を 25％選び、結果１で考察した。この結果を英語話者、中国語話者、韓国語話者別にデータを分けると表３のようになる。

英語話者は「受身 / ラレ－テイル」を選ぶ傾向が強く、-e- 自動詞では、47％が「受身 / ラレ＋テイル」を選んでいる。英語話者は、小林（1996）が指摘するように、文中にはない使役主が対象物に変化を与えた場合、結果状態を自動詞文で表すことを受け入れにくいのではと考えられる。影山（1996）は､英語と日本語の違いについて次のように述べている。

-e- 自動詞に関しては、英語はスル型言語として使役構造を基本的スキーマとして持っていて、(18) の x と y の立場は対等でなく使役主 (x) の視点から対象変化を眺めている。日本語では (18) の BECOME の主語がなくても、同定が可能になり、(18) のように、BECOME の主語がない場合でも、CONTROL の主語と BE の主語を同定することができる。

(18)　x ＝ y CONTROL［（y）BECOME [y BE AT-z]］

一方、-ar- 自動詞に関しては、英語には -ar- に対応する自動詞は存在しないと述べている。このような英語と日本語の自動詞文の違いが、英語話者が「受身 / ラレ－テイル」を選ぶ傾向が強いということの原因であると推測され、今回の調査により実証された。

また、中国語話者も英語話者ほどではないが、-e- 自動詞では 22％、-ar- 自動詞では 25％が「受身 / ラレ＋テイル」を選んでいる。望月（2003）は、中国語には自動詞・他動詞を区別する形態標識がなく、主語・目的語に格標識もないが、-e- 自動詞と -ar- 自動詞に関しては、「被 *bei*」受身、または「断 *duan*」などの状態を表す形容詞 / 自動詞が対応すると述べている。「被 *bei*」受身であらわすという点から考える、中国語話者にも、「受身 / ラレ＋テイル」を使う傾向があると推測できる。

韓国語話者は一番、率が低かったが、-e- 自動詞では、20％、-ar- 自動詞では 18％が「受身 / ラレ＋テイル」を選んでいる。田窪（2008）は、韓国語について、自他の対応を持つ

動詞の受身形は、接辞 /i/ および、その異形態を動詞につけて作るが、この受身形は例外的であって、基本的には接辞 /i/ は自動詞化の接辞であり、韓国語では自動詞形と受身の区別がなく、動作主が明示するか否かで区別されるだけであると述べている。このような韓国語の特質を考えると、使役主が文中に表わされない日本語の「自動詞－テイル」文を受け入れ易いと考えられる。しかし、「受身 / ラレ＋テイル」文を 20％近く選んでいる。何が混乱をまねくのか、さらに調査の必要があるであろう。

また、表３からは、-e- 自動詞文と -ar- 自動詞文を比較して、どちらの方が、受身と捉われ易いかということも検討できるが、英語話者では -e- 自動詞のほうが多いのに対して、中国語話者、韓国語話者に関しては、それほど大きな差はなく、今回の調査では、顕著な傾向は見られなかった。

７．おわりに

本稿では、日本語アスペクトマーカー「－テイル」の結果状態の習得に関して、主に動詞の統語の面から検討した。日本語には自他を転換する接辞形態が発達しているとともに、自動詞文には文中に現れない使役主が存在する場合があり、この隠れた使役主の存在から、「自動詞＋テイル」で表される結果状態を、「受身 / ラレ＋テイル」と捉える日本語学習者がいるのではないかと予測して、文法テストとピクチャーテストを行った。

影山（1996）が主張する -e- 自動詞と -ar- 自動詞を使って調査した結果、日本語学習者は、反使役化された -e- 自動詞文と脱使役化された -ar- 自動詞文で「受身 / ラレ＋テイル」文を選ぶ傾向があり、特に英語話者はその傾向が強いという結果をピクチャーテストより得た。この英語話者の傾向は、影山（1996）が述べているように、-e- 自動詞に関して、英語はスル型言語として、使役主の視点から対象変化を眺めるために、変化対象の変化を自動詞で表わさない。また、-ar- 自動詞に関しては、英語には -ar- に対応する自動詞は存在しないという特徴があり、これらの英語の特質のために、日本語の「自動詞－テイル」を受け入れ難い英語話者の学習者がいるのではないかと推測することができ、本調査で実証した。

また、このような視点の違いが予想される以外にも、中国語には -e- 自動詞と -ar- 自動詞は、「被 *bei*」受身、または「断 *duan*」などの状態を表す形容詞 / 自動詞で表わすという特徴があり、韓国語には自動詞化の接辞 /i/ があるという特徴がある。どちらの言語に関しても、「受身 / ラレ＋テイル」を選ぶ被験者は 20％前後で少なくなかった。しかし、本調査では各言語別の母語の影響の差あるいは、-e-、-ar- も含めて、接辞による習得の差を調査するに至らなかった。

今回の調査では、日本語母語話者の傾向も窺い知ることができた。結果状態に被害や迷惑の気持ちを感じた場合は日本語母語話者も「受身 / ラレ＋テイル」を使うであろうし、若い年代には「受身 / ラレ＋テイル」を使う傾向があることがわかった。この日本語母語話者の傾向も学習者をさらに混乱させることが考えられる。

最後に、結果状態の「－テイル」の教室での導入について考えたい。日本語の初級クラスで、教師が蝋燭の火を吹き消してから「蝋燭の火が消えています」、あるいは、教師が窓を開け

た直後に「窓が開いています。」などと導入した場合、使役主の存在が明らかであり、学習者は「自動詞＋テイル」で表わすということに混乱を覚える可能性がある。このことは今回の調査で確認できた。結果状態というアスペクトを習得する際には、まず、時間的な母語との違いにより、学習者は混乱する恐れがあり、さらなる混乱を避けるためには、日本語の自動詞には隠れた使役主があることを考慮して、先に述べたように使役主が明らかにわかるような導入は避けるべきであろう。また、導入後には、隠れた使役主を含意する日本語の自動詞の特質を説明することが必要な場合も考えられる。さらに、結果状態は全て「自動詞＋テイル」で表わすと教えがちであるが、学習が進むにつれて、被害 / 迷惑の「受身 / ラレ＋テイル」なども、触れていく必要もあるのではないだろうか。

参考文献

■ 影山太郎.（1996）『動詞意味論－言語と認知の接点－』くろしお出版

■ Hofmann,Th,R & Kageyama,T.(1986). *10 Voyages in the realms of meaning*. Tokyo: Kuroshio Shuppan

■ 小林典子 1996 「双対自動詞による結果・状態の表現　－日本語学習者の習得状況－」文藝言語研究　言語篇，Vol 29, pp41-56

■ 工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテクスト－現代日本語の時間の表現－』ひつじ書房

■ Shirai,Y. (1998) Where the progressive and the resultative meet: Imperfective aspect in Japanese, Korean, Chinese and English. *Studies in Language*, 22, 661-692.

■ Shirai,Y. (2000). The semantics of the Japanese imperfective –te iru. An integrative approach. *Journal of Pragmatics*, 32, 327-361.

■ Shirai,Y. (2002). The aspect Hypothesis in SLA and acquisition of Japanese. Invited review article, *Acquisition of Japanese as a second Language*, 5, 42-61.

■ Shirai,Y. (2004). A multiple-factor account to form-meaning connection in the acquisition of tense-aspect morphology. In Van Patten, B. et al(ed.) *Form-meaning connections in second language acquisitions*(pp91-112). Mahwah, NJ: L. Erlbaum Associates.

■ 望月圭子（2003）「日本語と中国語における使役軌道交替」『松田徳一郎教授追悼論文集』

■ 田窪行則（2008）　日本言語学会・夏期講座２００８ 対照言語学講義より

■ 富田英夫（2007）『日本語文法の要点』　くろしお出版